

# 隨泉寺寺報

平成24年(2012年)2月号 第498号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

仏婦講座

講師 東善坊住職 龍花 康丸師

講題 『安心して悩み、生き生きと』

■仏婦講座 ～九条武子様のご命日をおして～

「かの一日の一大天災と同時に更生(こうせい)した私」～無憂華序章より～

九条武様は、90年前の関東大震災に遭われて仏婦活動を組織して救援活動を始められた。

関東大震災で、阿鼻叫喚(あびきょうかん)の地獄界をみて、唯(ただ)のたとえ話と思っていた地獄の恐ろしさを目の当たりにしたときに、「人もわれも 阿鼻叫喚の地獄界 ただにたとえと おもひてありき」と、歌われている。更生というのは、蘇生(そせい)と同じところで、「生まれ変わる」ことだと、気づかされる。『歎異抄』後序より、「火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞ まことにておはします」と、親鸞聖人は仰せられる。

「金剛石も みがかずば のひかりは そわざらむ 人も学びて後にこそ ま あらはるれ」 真の信心を金剛心という、金剛心は阿弥陀如来からたまわる心だから、如来の心すなわち本願との出会い、本願に気づかせていただくこと、体で感じる事がなければならぬ、と示されました。

## 2月の法座予定

- 2月 2日 …… 門信徒本部役員会
- 2月 11日 …… 掃除 出口宮原
- 2月 14日 昼席午後1時より …… 仏婦講座
- 2月 15日 朝席午前10時より …… 追悼法要 おとき
- 2月 15日 昼席午後1時より …… 仏婦講座

## ☆ ☆第52回仏婦講座

2月14日・15日と第52回仏婦講座を開催します。15日の朝席は物故会員の追悼法要を勤めます。今年は15名の会員の方がお浄土に還られました。15名の方はいづれも長生きでした。戦前、戦中、戦後を じて激動の時代を生き抜いて、ものの豊かな、平和な時代を築いてくださいました。また杉田ヨシコさんは、婦人部の役員として仏教婦人活動にご尽力いただきました。生前を偲びながら大切に勤めさせていただきます。

## ☆物故会員追悼法要 2月15日朝席(午前10時より)

物故会員氏名

1. 樽田 チサエ	93歳	平成23年3月6日	井原
2. 住田 壽々子	85歳	平成23年3月23日	平原西
3. 内海 恵	89歳	平成23年4月8日	望ヶ丘
4. 高橋 保子	86歳	平成23年4月18日	長者原西
5. 杉田 ヨシコ	93歳	平成23年4月23日	井原
6. 柿村 松枝	87歳	平成23年5月4日	鴨の巣
7. 福永 慧子	77歳	平成23年6月12日	長者原西
8. 有吉 静枝	96歳	平成23年6月20日	中須賀
9. 柳田 トモコ	75歳	平成23年7月9日	上平原第2
10. 上平 数子	98歳	平成23年7月9日	上平原第1
11. 津田 マサヨ	100歳	平成23年7月25日	長者原西
12. 和田 栄	92歳	平成23年8月13日	平原西
13. 佐々木 光子	85歳	平成23年10月1日	荒野
14. 中垣 ミチエ	97歳	平成23年12月12日	長者原東
15. 畑中 幸子	83歳	平成24年1月21日	コモンライフ

以上15名の会員の方が還浄されました。

## ※ だれにでもできるダーナ

ダーナは、仏教語で〈布施〉のことで、財施・法施・無畏施に分かれます。なかでも、無財の七施は、いつでも・だれでも・自分の出来る範囲で実践できるダーナであり、まことの教えが広まる願いと思いやりのある生き方を示すものとして知られています。ダーナを行うにあたっては、「させていただいて、ありがとう」という気持ちを忘れないようにしましょう。

- 1、眼施(げんせ) 暖かいまなざし
- 2、和顔悦色施(わげんえつじきせ) にこやかな表情
- 3、言辞施(げんじせ) 優しい言葉
- 4、身施(しんせ) 精一杯の行い
- 5、心施(しんせ) いつくしみ深い心
- 6、床座施(しょうざせ) 人に暖かい席を
- 7、坊舎施(ぼうしゃせ) 気持ちよく迎える心がけ

2月

願われていた私

赦してもらって生きていた私

(※北村君という男の子が、授業中に「喉の奥にベロンとぶらさがっているものは、どんなはたらきをしているのですか」と東井先生に質問をしました。東井先生はすぐに答えることができずに、学校がおわったあと、図書館に行って、夜おそくまで調べて、やっとわかったそうです)

借りて帰った参考書によると、喉の奥のところで、鼻から吸った空気が肺に入っていく気管の道と、口から入った食物が胃袋に進む食道の道とがわかれているというのです。そのわかれ道で、食べものが道をまちがえて気管の方へ進むことにでもなると、窒息してしまうこととなります。そういうことにならないように、私どもが子どもの頃からノドチンコといってきたもの—ほんとうは「口蓋垂」というのだそうですが—食べた物をのみ込むとき、気管の入り口を蓋してくれるとありました。



このことがわかったとき、私は、ほんとうに大きなショックを受けました。そのこ

とを知らないくらいですから、お礼をいったことはもちろんありません。「ご苦労だな」と思ったことさえありません。それどころか、「俺が生きていてやるのだ」とでもいうように威張り散らして生きてきたのです。そんな私のために、生まれて乳のみはじめたときから、はたらきづめにはたらいていてくれたのです。

そして、気がついてみたら、ノドチンコだけではないのです。「目」があって、どんな仕組みになっているのか、何でも見せてくださるのです。「耳」があって、どういう仕組みになっているのか、何でも、聞かせてくださっているのです。鼻に穴があいていて、呼吸がはたらきづめにはたらいていてくださっているのです。この呼吸がとまったら、忽ちのうちに死んでしまわなければならない呼吸です。いのちにかかわる呼吸です。そのいのちにかかわる呼吸を、その主人公である私は、忘れっ放しなのです。その忘れっ放しの私のために、夜も昼も、土曜も日曜も、盆も正月も、一瞬の休暇もとらず、はたらきづめにはたらいていてくれるのです。

「口」があり、「口」には「歯」があり、「舌」があり、食べものを噛みこなすはたらきをしていてくれるのです。食べ物が「胃」に入り「腸」に進み、血にし、肉にし、骨にし、はたらきのエネルギーに変わっていくのです。胸の中では、「心臓」が、これも年中無休ではたらいてくれているのです。「生きている」つもりでいたら、何もかも「生きさせてもらっていた」のです。仏さまは、私の中で、私といっしょに、私のために、忘れっ放し、逆きっ放しの私のために、生きてはたらいていてくださっ

ていたのです。

「北村君ありがとう」「北村君ありがとう」私は、そうつぶやかずにはおれませんでした。私は、こうして、北村君のおかげで、

「生かされていた私」

「願われていた私」

「祈られていた私」

「赦してもらって生きていた私」

に、目覚めさせていただいたのです。

## 関東大震災と九条武子様

東大の地震研究所の平田教授は、4年以内にマグネチュード7.0クラスの大地震の起こる確率は70%と予測しました。これは大変なことです。

今から90年前、大正12年(1923)9月1日関東地方で震度6という大地震が起きました。関東大震災(かんとうだいしんさい)は、1923年(大正12年)9月1日11時58分32秒(以下日本時間)、神奈川県相模湾北西沖80km(北緯35.1度、東経139.5度)を震源として発生したマグニチュード7.9の大正関東地震による地震災害です。

神奈川県を中心に千葉県・茨城県から静岡県東部までの内陸と沿岸に広い範囲に甚大な被害をもたらし、日本災害史上最大級の被害を与えた。190万人が被災、10万5千人余が死亡あるいは行方不明になったとされる。

九条武子夫人は、関東大震災で東京が未曾有の被災者を出したときに、真宗婦人会と共に日比谷公園などに救護救済所(後のアソカ病院)や簡易食堂を開設して、震災孤児などの被災者救済のために献身的な活動をされました。その後、東京真宗婦人会会長を勤められるなど児童愛護にご尽力されますが、大正13年、その過労のために発病されて、昭和3年2月7日に41歳でお亡くなりになりました。法名は「厳浄院釈尼鏡照」、和田堀廟所に埋葬されました。和田堀廟所は京王線の明大前駅から徒歩10分のところ。甲州街道の上を走る首都高速道路の永福出口がすぐ前にあります。関東大震災で築地本願寺の本堂が焼壊したとき、この地に仮本堂を移築し築地にあった多数の墓地を移転して和田堀廟所として建立されたと、沿革案内には記されています。当時は武蔵野の影をとどめる川上水路は水清く小鳥のさえざる自然公園の墓地です。

